

(別紙1)

論文の内容の要旨

論文題目 巴金文学における異邦人

氏名 趙昶佑

本稿では中国の作家である巴金（パーチン、1904～）の異邦滞在経験および中国国内での異邦人との交流に基づいて書かれた異邦人をモデルとする作品にスポットを当てることにより、巴金と異邦人アナキストとの文通、巴金自身の異邦滞在経験、中国国内での異邦人との交流、アナキズム思想との関係を並行して論じた。

本稿は以下のように構成されている。

第一章 巴金とエマ・ゴールドマン

- 一 エマ・ゴールドマンと中国
- 二 『新青年』と『実社自由録』に紹介されたエマの論文
- 三 「愛国主義与到中国人幸福的路」と「Patriotism」
- 四 エマの訪中記事と文通

第二章 フランス滞在と『復讐』の誕生

- 一 イズムに殉ずる渡仏
- 二 サッコ・ヴァンゼッティ事件—“殉道者”の発見
- 三 シュワルツバーのペトリウラ暗殺事件とその公判
- 四 巴金と施蛰存との論争
- 五 一九二〇年代のパリ
- 六 「復讐」—ポグロムの問題
- 七 「亡命」「亜麗安娜」—亡命の問題

第三章 巴金と朝鮮

- 一 朝鮮人との出会い 成都→北京→上海

二 1920年代の上海

三 上海を舞台とした朝鮮人亡命者の物語―「髮的故事」

四 「火」1部

第四章 巴金と日本

一 巴金と大正のアナーキスト

二 巴金の目に映じた30年代の日本

三 横浜でのホームステイ

四 東京体験

第一章では、巴金とエマ・ゴールドマンについて論じる。第一章の目的は、従来の研究ではあまり取りあげることのなかった巴金とエマ・ゴールドマンとの関係を探った。エマ・ゴールドマンは巴金と文通のあった最初の異邦人で、彼女の著作は巴金に多くの影響を与えた。特に、巴金の「愛国主義と到中国人幸福的路」はエマの「Patriotism」から啓発を受けて執筆されたと思われる。第一章では、エマが中国に紹介された経緯と彼女の論文が主として掲載された北京の『新青年』と『実社自由録』、巴金の「愛国主義と到中国人幸福的路」とエマの「Patriotism」との関係、そして巴金との文通の状況を論じてきた。

エマが中国に初めて紹介されたのは、『母なる大地』が創刊された翌年の1907年のことである。『民声』第二十一号(1914年8月)に、「高曼 Emma Goldman 女士」が載っている。文章にはアメリカでのエマの活動と『母なる大地』について触れており、エマの著作『The Social Significance of the Modern Drama』が民声社に郵送されたことが述べられている。第三十三号(1921年7月)に掲載された「高路曼 (Emma Goldman)」(『近世女無政府党伝略 続』)では、エマの経歴やアムステルダム会議での演説の模様、そしてエマの著作『The Social Significance of the Modern Drama』、『Patriotism』の内容が紹介されている。このうち、『Patriotism』は巴金の「愛国主義と中国人を幸福に導く道」に少なからぬ影響を与えた文章である。

エマと書簡のやりとりをするまでは、エマは巴金にとって書物を通じて想像される遠い存在であった。だが書簡のやりとりを通じて二人を隔てている空間的な距離は一気に縮まった。巴金はフランス留学中にもエマと数回書簡のやりとりをする。エマとの往復書簡は、手紙による異邦人アナーキストとの連帯の口火を切る役割を果たしたといえよう。

第二章では、主に巴金のフランス滞在とフランス滞在がきっかけとなって執筆された『復讐』所収の亡命とボグロムの問題を題材とした作品を論じた。その際、巴金がフランスに渡るまでのいきさつとフランス滞在中のヴァンゼッティとの文通、そして20年代のパリの状況をもあわせて考察した。第二章の目的は巴金の最初の国外移動であるフランス留学に注目し、そのフランス体験が契機となって書かれたボグロムと亡命を題材とする作品の背景を明らかにすることによって、巴金文学におけるボグロムと亡命の問題の位置付けを試みることであった。

20年代(特に27年以降)のパリは、ロシアやヨーロッパからの移民や亡命者が急増していた。当時多くの外国人がフランスに渡った背景には、上述したような他国に先駆けたフランス経済の回復とともに亡命者に避難所を与えるフランスの伝統がある。巴金が部屋を借りて住んでいたカルティエ・ラタン区は、国際都市パリの中でも外国人が多く集まる地

区であった。ここで巴金は彼の小説のモデルとなる外国人亡命者に出会ったのだ。

フランス滞在は巴金にとって初めての外国滞在であり、フランスで書いた「滅亡」は彼のデビュー作となった。またフランスでの体験は彼の最初の短編小説集『復讐』の題材の元となり、巴金にとって異邦人を描くひとつのきっかけを与えた。パリで知り合った亡命者の境遇を通じて彼は中国国内にいる朝鮮人亡命者の状況を理解することができ、朝鮮人亡命者をさらに客観的に見る視野を持つようになる。小説「復讐」のモデルであるユダヤ人、シュワルツバーを通じては抑圧される民族の悲哀を覚え、彼は被圧迫民族同士の連帯感を感じたようである。サッコ・ヴァンゼッティ事件はフランスにいた頃の巴金にとっては一番の出来事であった。事件の犠牲者は巴金と同様、祖国を離れて異邦の地にいたアナーキストであった。事件を通じて巴金は世界に散在するアナーキスト同士との連帯感を深めることができ、一層アナーキズムに充実することを自ら誓う。

第三章では、建国以前に巴金と知り合った朝鮮人について述べてきた。フランスに行く前に巴金は北京と上海で朝鮮人アナーキストと知り合う。とりわけ、20年代の上海には多くの朝鮮からの亡命者が集まっていた。三章では上海（特にフランス租界）に多くの朝鮮人が集まった理由も合わせて論じたのだ。また、朝鮮人革命者をモデルとする巴金の作品「髪故事」と「火」1部を取りあげて建国前の巴金と朝鮮人との関わり方を探ってみた。

巴金と朝鮮人との交流は、フランスで知り合った異邦人及び日本滞在中に知り合った日本人との交流とは異なって中国国内で行われた。すなわちフランスや日本での巴金は訪問者の立場として現地在住の人と接したが、朝鮮人との交流は巴金が自らの母国で彼らを受け入れる立場に変わったといえよう。フランスや日本での巴金は異邦人の立場として、その国の状況や現地の人を冷静なおかつ客観的に見ることができた。しかし彼が一旦中国に帰国すると、異邦人ではなく一人の作家巴金に変わるのだ。ホストの立場から自分の国に亡命している異邦人の境遇を、巴金は中国人の読者にできるだけ客観的に伝えようとしたと思われる。その根底にあるのは、彼自身の異邦体験にほかならないだろう。

第四章では、主に日本滞在中の巴金について論じた。まず、共同体の中で排除されて死に到った大正のアナーキスト大杉栄と古田大次郎から巴金が受けた影響をまとめ、34年11月から翌年夏までの巴金の横浜と東京滞在を取りあげて巴金の目に映じた30年代の日本社会を再現してみた。そして、来日中に書かいた短編小説集『神・鬼・人』を取りあげてホームステイ先の主人、武田武雄が巴金文学に描かれた異邦人像の中で如何なる位置を占めているのかを論じた。

巴金と日本人との関わり方は、アナーキズムと戦争という二つの相容れない概念によって説明されることができる。来日以前の巴金と日本人との関わり方の根源には、大杉栄や古田大次郎を追悼する文章を見て分かるようにアナーキズムという共通の理想を追求する連帯意識があった。巴金にとって大杉や古田は、彼が尊敬してやまなかったエマ・ゴールドマンヴァンゼッティのようなアナーキストと同様に理想を友にする人物であった。しかし、戦争の暗雲が漂う中での来日と家の中で閉じこもって宗教活動をする武田との出会いによってそれまで思っていた日本人観が少しずつ揺れはじめる。

ジンメルが遠く離れている（遠隔）者が近くて積極的な関係（近接）にあると説くように、巴金もフランス留学中に上海を舞台とする作品を書き、帰国後にフランスを舞台とし

たのである。また小松の異邦人分類を採用したから巴金の作品に登場する異邦人、また彼と文通などで関わった異邦人をいくつかの類型に分類することができた。但し日本滞在中の武田武雄は小松の分類には当てはまらない人物であり、巴金と関わった異邦人の中では異彩を放つ人物であるといえよう。またマイケル・ウォルツァーの「排除」と「歓待」の概念は、中国に亡命中の朝鮮人とフランスに亡命中のヨーロッパアナーキストが亡命先の政府の政策や戦争のような非常事態によって排除された人が歓待され、歓待された人が排除されることを論じる一つの手がかりとなっただろう。